

餘

餘

霞

霞

筆は直にはあがらぬ

散

散

何

〇



王羲之(三〇七〜三六五)の蘭亭序、集字聖教序の倣書で書いています。王羲之は、書聖といわれた人物です。用筆、字形ともにすぐれており、筆使いは自在で伸びやか、字形も変化に富んで豊やかな表情である。

余霞散じて綺を成す

夕焼け雲が空に散ってあやぎぬのようになる。

(南齊・謝朓作)

減

減

減

空ける

線がぶつかるリツめる

母字の中に  
白を残す部分と  
つめる部分を作る

4

2

3

6

5

1

10

7

8

10

2

9

11

14

12

13

6

5

4